

医研第337号

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Eustachian Tube Function and Habitual Sniffing in Middle Ear Cholesteatoma  
(真珠腫性中耳炎における耳管機能と鼻すすり癖)

氏名 大田重人 




【目的】	耳管開放症に伴う鼻すすり癖が真珠腫性中耳炎と密接に関連していると報告されているが、実際の耳管機能と鼻すすり癖の両方を調査した研究はみあたらない。本研究の目的は真珠腫性中耳炎症例の耳管機能と鼻すすり癖を調査し、対側耳病変を含めて他の中耳疾患と比較することにより、耳管開放症と鼻すすり癖の真珠腫性中耳炎との関連性を明らかにすることである。
【対象と方法】	2005年7月から2007年12月までに手術した一次性真珠腫性中耳炎新鮮例113例を対象とし、慢性穿孔性中耳炎新鮮例178例と耳硬化症新鮮例30例を比較対照とした。耳管開放症状（耳閉感、自声強調、呼吸音聴取）とそれを改善するため鼻すすり癖の有無を問診表を用いて調べ耳管機能検査装置により音響法にて耳管機能を評価した。対側耳についても状態を確認し耳管機能検査を行った。さらに、外耳道後壁保存型にて手術し、術後6ヶ月以上経過観察

し	た	真	珠	腫	性	中	耳	炎	症	例	で	術	前	後	の	鼻	す	す	り	
癬	と	鼓	膜	再	陥	凹	の	関	連	性	を	調	べ	た	。					
【	結	果	】	患	側	耳	の	耳	管	機	能	は	真	珠	腫	性	中	耳	炎	
で	は	開	放	型	2	5	.	7	%	で	、	慢	性	穿	孔	性	中	耳	炎	
(	1	1	.	2	%	)	(	P	<	0	.	0	1	)	お	よ	び	耳	硬	
化	症	(	6	.	7	%	)	(	P	<	0	.	0	5	)	と	比	較	し	
て	有	意	に	開	放	型	を	多	く	認	め	た	。	鼻	す	す	り	癬	は	
真	珠	腫	性	中	耳	炎	で	は	2	7	.	4	%	に	認	め	、	慢	性	
穿	孔	性	中	耳	炎	(	5	.	1	%	)	(	P	<	0	.	0	0		
1	)	お	よ	び	耳	硬	化	症	(	3	.	3	%	)	(	P	<	0	.	
0	5	)	よ	り	有	意	に	多	く	認	め	た	。	次	に	対	側	耳	病	
変	を	調	べ	る	と	、	真	珠	腫	性	中	耳	炎	は	慢	性	穿	孔	性	
中	耳	炎	と	比	較	し	て	対	側	耳	に	高	度	な	陥	凹	性	病	変	
を	高	率	に	認	め	た	(	P	<	0	.	0	0	1	)	。	真	珠	腫	性
中	耳	炎	の	う	ち	対	側	に	も	高	度	な	陥	凹	が	あ	っ	た	症	
例	で	は	5	6	.	3	%	に	鼻	す	す	り	癬	を	認	め	、	対	側	
が	正	常	だ	っ	た	症	例	(	9	.	1	%	)	と	比	較	し	て	鼻	
す	す	り	癬	が	有	意	に	多	か	っ	た	(	P	<	0	.	0	0		
1	)	。	逆	に	鼻	す	す	り	癬	の	あ	る	症	例	で	は	8	3	.	
9	%	に	対	側	耳	病	変	を	認	め	、	鼻	す	す	り	癬	の	な	い	

症	例	(	3	9	.	0	%	)	と	比	較	し	て	有	意	に	対	側	耳	
に	病	変	を	多	く	認	め	た	(	P	<	0	.	0	0	1	)	。	対	側
耳	の	耳	管	機	能	を	み	る	と	、	真	珠	腫	性	中	耳	炎	の	対	
側	耳	で	は	開	放	1	3	.	3	%	で	、	慢	性	穿	孔	性	中	耳	
炎	(	8	.	4	%	)	お	よ	び	耳	硬	化	症	(	6	.	7	%	)	
と	比	較	し	て	有	意	差	は	な	か	っ	た	。	し	か	し	、	鼻	す	
す	り	癬	の	あ	っ	た	真	珠	腫	性	中	耳	炎	で	対	側	耳	病	変	
を	対	側	耳	の	耳	管	機	能	別	に	比	較	す	る	と	開	放	型	を	
示	し	た	症	例	の	9	0	.	9	%	に	高	度	な	陥	凹	病	変	を	
認	め	、	正	常	型	で	あ	っ	た	症	例	よ	り	も	対	側	耳	の	陥	
凹	病	変	が	有	意	に	多	か	っ	た	(	P	<	0	.	0	1	)	。	さ
ら	に	、	外	耳	道	後	壁	保	存	型	鼓	室	形	成	術	を	施	行	し	
術	後	6	ヶ	月	以	上	経	過	観	察	し	た	真	珠	腫	性	中	耳	炎	
症	例	を	調	査	し	た	結	果	、	術	前	後	と	も	に	鼻	す	す	り	
癬	を	継	続	し	た	症	例	で	6	6	.	7	%	に	術	後	再	陥	凹	
を	認	め	、	鼻	す	す	り	癬	の	な	か	っ	た	症	例	(	1	3	.	
8	%	)	と	比	較	す	る	と	有	意	に	術	後	再	陥	凹	率	が	高	
か	っ	た	(	P	<	0	.	0	5	)	。									
【	結	論	】	耳	管	開	放	症	と	そ	れ	に	伴	う	鼻	す	す	り	癬	
は	真	珠	腫	性	中	耳	炎	の	病	因	の	一	つ	と	考	え	る	。		

(別紙様式第7号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	大田 重人
論文審査委員	審査日	平成 21年 6月 22日	
	主査教授	加藤 誠也	
	副査教授	大田 孝男	
	副査教授	青木 一雄	
(論文題目)			
Eustachian Tube Function and Habitual Sniffing in Middle Ear Cholesteatoma (真珠腫性中耳炎における耳管機能と鼻すすり癖)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的			
<p>真珠腫性中耳炎（以下真珠腫）の原因は解明されていない。耳管開放症と真珠腫の関連が報告されているが、実際に個々の症例で耳管機能の測定と耳管開放症に伴う鼻すすり癖の調査の両方を同時に検討した研究はみあたらない。本研究の目的は真珠腫症例の耳管機能の測定と鼻すすり癖の調査を施行し、対側耳病変を含めて検討することで、耳管開放症に伴う鼻すすり癖と真珠腫の関連性を明らかにすることである。</p>			
2. 研究内容			
<p>【方法】2005年7月から2007年12月までに手術を施行した真珠腫新鮮例113例を対象とし、慢性穿孔性中耳炎（以下慢性中耳炎）新鮮例178例と耳硬化症新鮮例30例を比較対照とした。耳管開放症に伴う鼻すすり癖の有無をアンケート調査し、耳管機能を音響法にて評価した。さらに、外耳道後壁保存型鼓室形成術を施行し、術後6ヶ月以上観察し得た症例で術前後の鼻すすり癖と鼓膜再陥凹の関連性を検討した。</p>			
<p>【結果】術側の耳管機能は真珠腫では開放型25.7% (29/113) で、慢性中耳炎 (11.2%、20/178) (<math>P &lt; 0.01</math>) および耳硬化症 (6.7%、2/30) (<math>P &lt; 0.05</math>) と比較して有意に開放型が多かった。鼻すすり癖は真珠腫では27.4% (31/113) に認め、慢性中耳炎 (5.1%、9/178) (<math>P &lt; 0.001</math>) および耳硬化症 (3.3%、1/30) (<math>P &lt; 0.05</math>) より有意に多く認めた。対側耳病変との関連については、真珠腫のうち対側にも高度な陥凹があった症例では56.3% (18/32) に鼻すすり癖を認め、対側が正常だった症例における9.1% (5/55) と比較して鼻すすり癖が有意に多かった (<math>P &lt; 0.001</math>)。逆に鼻すすり癖のある症例では83.9% (26/31) に対側耳病変を認め、鼻すすり癖のない症例での39.0% (32/82) と比較して有意に対側耳病変を多く認めた (<math>P &lt; 0.001</math>)。耳管機能を見ると、真珠腫の対側耳では開放型を示す例が13.3% (15/113) であり、慢性中耳炎 (8.4%、15/159) および耳硬化症 (6.7%、2/30) における頻度と比較して有意差はなかった。しかし、鼻すすり癖のあった真珠腫31症例に限って検討すると、開放型の耳管機能</p>			